

暮らしを支えた牛たち—飯能の牛—

引間 隆文

今年初の「That's きっとす」です。本年も引き続きご愛読のほどをよろしくお願ひいたします。

今年は丑年ですので、新年初回は牛についてのお話です。



牛による材木運搬
鴨下近造氏所蔵

牛は、偶蹄目ウシ科の動物で、食肉用や耕作、運送といった用途で使役する家畜として古くから人類に身近な動物です。エンジンもモーターもない時代、牛や馬は最も頼りになる動力源でもありました。かつては人が暮らす母屋の一角に牛馬を飼うスペースを設けるほど、今よりもはるかに人との関係が近かったのです。

一般的に「東の馬・西の牛」と言われるように、馬は東日本で、牛は西日本で多く用いられていました。飯能でも主には馬でしたが、明治時代の中頃になると徐々に牛が使役用として用いられるようになりました。大正時代には、性質が温和で力が強く飼いやすい牛が朝鮮半島から移入され

全国的に普及していきました。その牛は、特に運送用の牛車を引くのに重宝されており、西川材の産地である飯能では材木の運搬に用いられることもありました。ただ、牛馬を飼育するには、それなりの経費を要します。そのため所有できるのは限られた家のみでした。

牛には、食肉用や使役用の他に牛乳を得るための乳牛もいます。我が国で牛乳が一般的に飲まれるようになったのは明治の文明開化以降ですが、飯能で乳牛のための牧場経営が始まったのは少し遅れて明治時代の末のことです。ただ、今のように牛乳や乳製品が必需品だったわけではありませんので、戦時色が濃くなると共に営業困難になっていきました。

飯能で乳牛が一気に増えたのは戦後のことです。少ない頭数を飼育し牛乳を出荷する寡頭飼育が流行したことにより、多くの農家が乳牛を飼うようになりました。『飯能市史資料編X 産業』によれば、飯能市域(名栗地区を除く)において昭和25(1950)年には馬が28頭、役肉牛(使役用・食肉用)が162頭、乳牛は115頭いました。それが昭和35(1960)年になると、馬が4頭、役肉牛が20頭と減少しているのに対し、乳牛は429頭と激増しています。しかしながら、乳価格の下落や糞尿処理・悪臭の問題により、各農家の乳牛飼育は行われなくなっていました。

かつては身近にいた牛ですが、今では動物園や牧場にでも行かないとなかなか触れ合うことができません。今年は、牧場で美味しいソフトクリームでも食べながらのんびり牛と触れ合ってみたいものです。

【参考文献】

飯能市史編集委員会『飯能市史資料編X 産業』飯能市 昭和63(1988)年3月20日